

2021年9月30日

2021年8月 Nr. 486。

さて、今回は、ドイツでの Jugendweihe (「成人式」) が話題になっています。

„Direkt aus Europa“の486号においては2020年10月6日放送分の2つの録音を聞くことができます。一つは南西ドイツ放送 (Südwestrundfunk) からのものですし、もう一つはドイツ放送 (Deutschlandfunk) のものです。一つは午後の放送分からですし、もう一つは夜間の放送分からです。火曜日の夜間の放送においてA面の29分47秒には、4万の人口とカトリックの司教所在地を有する、ネッカー川のほとりの街 Rottenburg について言及されています。この都市の名前は二つの „t“ で綴られますので、この綴りが短母音の „o“ であることがすぐ分ります。しかしながら、詳細に見ない人は、この語について „h“ を伴うか、伴わないで書かれる長母音の „o“ を有する都市の名前とちょっと混同することがあります。その内の一つはタオバー川 (die Tauber) 沿いに位置する Rothenburg ですし、もう一つはフルダ川 (die Fulda) 沿いに位置する Rotenburg です。

午後の収録音声では、「人生」 („Leben“) というシリーズ番組において、Jugendweihe という「成人式」が話題になっています。これは、プロテスタントでもなければ、カトリックでもない若者たちにとっては、Konfirmation または Firmung と呼ばれる「堅信 (礼)」というイベントに代わるものです。人が18歳になると成人し、投票することができますことになっても、ことさらこれを祝うことはありませんが、人は14歳になるとはや子供ではなくなります。そしてこれを祝福したいと願います。Konfirmation および Firmung などの「堅信 (礼)」は準備しなければなりません、Jugendweihe という「成人式」には準備講習に参加することなくして行くことができます。しかしながら、多くの人にとって準備講習は祝典より重要です。しかしながら重要なのはまた、親戚からの祝典日のためのプレゼントです。ある少女は、兄 (弟) と一緒に叔母と両親から外国旅行を、そして他の親戚たちからお金をプレゼントされたことを覚えています。

インゲルハイム・アム・ライン (Ingelheim am Rhein) では、毎週土曜日の午前、簡素なセミナーハウスで講習が開催されます。若者たちは両親によってそこに連れて来られます。その講習会の講師は、エグガートさん (Herr Eggert) が務めます。エグガートさんはまず、講習会参加者らに自己紹介し、自分が既婚者であること、二人の子供がいること、そして彼の上の子も3年前にこの種の講習に参加したことなどを話します。エグガートさんは若者らと一緒に礼儀作法を練習・訓練し、彼らに行動規範や礼儀正しさを教えます。これはこのグループの若者たちが1年に亘り成人式のための準備をしている10のイベ

ントのうちの一つです。この講習には 6 人の少女と 6 人の少年が参加しています。エッグートさんは、少年少女各々に互いに自己紹介するように、また互いに考え方・立場を述べるあうように求めます。彼らは相手の目を見なければなりません。彼らは自分がどのような人間なのか、そして自分が他の人にどのような印象を与えるのかを意識しなければなりません。

もうひとつの他のテーマは食事中にどう振る舞うか、つまり礼儀作法です。高級レストランで複数の料理を食べる場合、すべての料理のためのカトラリーが初めから皿の横に並べられています。それでどこに着席すべきか分ります。すると、ウェイターがこの皿を取り去り、前菜を盛付けた皿を置きます。これを食べるためには、皿の左右の外側に置いてあるカトラリーから使います。どの料理の後もそれらのカトラリーは皿に載せて置きます。そうするとこれをウェイターが片付けてくれます。

若者たちは、予め準備講習のために自分たちでみずから提案を行います。そして、リストをもらい、自分が特に興味があるものを選び出します。それには、例えばテレビスタジオ、州議会またはクライミングパークを一緒に訪問することなどが含まれます。州議会は州の議事堂ですが、そこで彼らは州議会のひとつの会議において傍聴することができます。その上で、州議会議員とその会議でテーマになったことについて話すことができます。

19 世紀半ばまでは、誰でもプロテスタントまたはカトリック式に洗礼を施されることが当然だったように、若者は誰でも堅信式に行くことが当然だったのです。その後これは変わりました。なぜならば、多くの方は、教会が彼らに求めるものについて、もはやすべてに同意できるわけではなくなったからでした。分裂が起き、これらのグループは自由信仰の教区民と合同しました。成人式について話題にするとき、大抵のドイツ人は旧東ドイツを思い出します。というのは、旧東ドイツにおいては 1955 年からすべての若者は成年式 (14 歳に達した青少年に社会主義への忠誠を誓わせ大人の社会に組み入れる式典) に行かなければならなかったからでした。そこでは彼ら青少年らは旧東ドイツの良き国民として社会主義のために働き、戦うことを誓いました・・・。

さて、今回話題になっている Jugendweihe は、私の手元の 5 種類の独和辞典によれば、いずれも「成人式」という訳語が掲載されています。しかしながら、日本人にとっては、「成人式」はその言葉が示すとおり、新しく成人になった人、つまり 20 歳になった人を対象とする儀式となっていますので、今回話題になっている Jugendweihe は対象となる年齢が 14 歳の頃であることを考えますと、「成人式」という日本語を充てるのは大分違和感を覚えます。さて、とはいうものの、より適切な他の日本語が思い浮かびませんので、便宜的にカギ括弧付で「成人式」とせざるを得ないのですが・・・。

今回の放送・課題を聴いて Jugendweihe はとても意義のあるものだと感じましたし、重要であるとも思いました。その対象となるのが 14 歳のころの若者であることに関しては幾分低いような気がしますが、それでも成人する前の一時期に、大人になる前に様々な知識や作法を学ぶ事は必要だと思うからです。この年代の若者は親や兄弟などの家族や親戚からだけでなく、教師、友人、先輩、近隣の人々などとのつきあいを通じて、また書籍、マスメディア、インターネットなどによりいろいろなことを学び、成長するものだと思いますが、それとは別にちょっと改まった形式でこのような機会を与えられることは刺激も受けるでしょうし、有意義だと思います。そのような自治体に生まれ、育った若者たちは、そうでない若者たちに比べ幸運ではないかと思いました。また、Jugendweihe が無宗教の人々のためのものだとすれば、カトリックが他の州に比べ多いバイエルン州においては Jugendweihe があまり普及していないことにも納得できます。

ところで、今回の放送で特に印象に残ったのは、ヤキーラ (Yakira) さんの母親ヤナ (Jana) さんです。彼女は現在、ラインラント・プファルツの Jugendweihe の世話人の 1 人を務めています。何と 20 年前には彼女自身がコットブス (Cottbus) で Jugendweihe を経験していたのです。彼女にはその経験が有意義だったことが窺えます。というのは、今度は世話人を務めると共に 2020 年には自身の娘を Jugendweihe に参加させたからです。ひょっとすると将来、ヤキーラさんが世話人を務める Jugendweihe にその娘または息子が参加するかもしれません。

私は今まで、Jugendweihe について知りませんでしたので、例えばドイツ出身の人に対して Jugendweihe について尋ねたことはありませんでした。今回初めて知り、興味を持ちましたので、何かの機会にドイツ出身の人に対し「堅信 (礼)」または Jugendweihe を経験したことがあるかどうか、あるとすれば具体的にどのようなことを経験したのか、どのような印象を持ったかなど是非尋ねてみたいと思いました。

ところで、日本における成人は 20 歳である旨上述しましたが、2022 年 4 月 1 日より、これまでの成人年齢 (1896 年の民法規定により 20 歳とされたそうです) が 18 歳に引き下げられます。この引き下げが施行されるのに伴い、自治体によっては従来からの 20 歳の青少年だけでなく、18~19 歳に達した人も成人式の対象とすることもあるようです。成人式の有無とは別に、これで日本の成人年齢が国際的な標準である 18 歳と合致するようになります。

K. K

2021年10月28日

2021年9月 Nr. 487

さて、今回は「裁判官の誤審」が話題となっています。

司法は、民法および刑法に関する法制・法律制度です。ここに必要とされるのは、裁判官、検察官および弁護士です。刑罰には、罰金刑および懲役、禁固など身体を拘束する自由刑があります。自由刑の判決を受けた者は、大抵、刑務所で自由刑を務めなければなりません。公式的には刑務所というのは、司法執行機関（Justizvollzugsanstalten）と称します。なぜならば、そこで囚人の自由刑が執行されるからです。

既に40年以上もドイツに住む1人のギリシャ人男性が2016年9月15日、その別れて住んでいた妻を殺害したことが明らかであると裁判官らからみなされ、2017年5月に殺人罪のため終身刑の判決が下されたため、ドイツ西部の刑務所に服役しています。

ハンブルクの弁護士であるシュトラテさん（Herr Strate）は、この事件の再審手続きを担当しています。シュトラテさんはこれに関して新しい証拠を提出しなければなりません。犯行現場でそのギリシャ人男性の指紋が付着した薬莖が発見されたことにシュトラテさんは驚きました。なぜならば、殺害を計画する者は、終身刑を覚悟しなければなりませんので、捕まらないようするためにあらゆることをするはずで、自分を示唆するような痕跡を全く残さないようにすると考えられるからです。

しかしながら、併せて発見されたのは、そのギリシャ人男性が犯行前および犯行時に身につけていたとされるフードと犯行現場から80メートル離れた森の中で彼の小銃のために造られた容器でした。シュトラテさんは、殺人者がそれほど不注意であるとは充分には想像できませんし、彼が以前にそこに狩猟で行ったことがあると推測しています。なぜならば、その薬莖は一部すでに錆びかけていたからでした。

シュトラテさんは、再審手続きを再三引き受けていることでも広く知られています。従って、シュトラテさんはそのような手続きを引き受けることをしばしば依頼されます。しかしながら、年に一度位しかやりません。なぜならば、そのような手続きは特に多くの時間がかかるからです。従って、依頼を引き受ける事件・案件については、慎重に選びます。シュトラテさんにとっては、それは趣味のようなものです。依頼人らはシュトラテさんに対しほんの僅かしか支払う必要がありません。たいていの人のために、シュトラ

レーテさんは、これをほぼ無報酬で行います。いわば、善意から行っていますが、シュトラレーテさんはそうすることができます。なぜならば、多額のお金を稼ぐことができる経済犯罪絡みの依頼が多いからです。シュトラレーテさんは既に70才を超えていますが、まだしばらくの間は仕事を辞めることは考えていません。弁護士には定年というものはありません。

シュトラレーテさんは、彼の依頼人が無罪であることを確信していますので、依頼を受けました。その依頼人は、シュトラレーテさんに対し犯人であるという印象ではなく、殺人を犯していないにもかかわらず刑を宣告されたために、とてもすねた、思いにふけっている人物という印象を与えました。それに、成功を期待する十分な複数の理由・根拠があると彼が言っていることが引き受けた理由として付け加わりました。刑事裁判所の1,000の手続きの内、わずか1案件においてのみ、完了した手続きの再審手続きの申請が行われます。そしてその内どれ位が成功するのかについては、データもありませんので分からないといえます。

問題は、裁判では公正だけでなく、法の平和、すなわちいわゆる法的安定性も重要です。誰も同じ犯行のために何度も処罰されることは許されません。従って、二度裁判にかけられることも許されません。誰も生涯にわたって再度身を守ることを覚悟する必要があるべきではありません。しかしながら、ドイツ連邦議会のSPD会派の法政策のスポークスマンは、時効の対象となり得ない犯罪においては、最初の裁判において犯人の重要なヒントが提示されなかったために、誰かが無罪とされた場合でも、新たな訴訟に持ち込めるべきであるという見解です。つまり、その場合には、問題になるのは、不当な無罪であり、無罪の判決を受けた人ではありません。

このギリシャ人の事件・案件では、押収された銃弾と薬莖はその間に破棄・処分されてしまっていたのですが、シュトラレーテさんは銃器の専門家に問い合わせました。しかしながら、まだ存在していた複数枚の写真は状態が良好で、その専門家は、殺害された妻の体内から取り出した散弾と犯行現場で発見された薬莖とが合致していなかったことを立証することができました・・・。

さて、再審は、「確定判決についての、再度の審理」（「ブリタニカ国際大百科事典」）ということですが、日本においても刑事訴訟法および民事訴訟法において認められています。この法律分野に全く詳しくない私にはそれ以上の解説をすることはできませんが、一点だけ言えることは、死刑制度がある日本と死刑制度が廃止されているドイツとを比べた場合、「再審」は日本においてより重みがあるのではなかという点です。なぜならば、万一誤審により死刑が執行された場合、取り返しがつかないからです。私が調べたところ、実際に日本ではそのような事例が存在します（「飯塚事件」）し、四大死刑冤罪事件のように死刑

が確定したものの、死刑が執行される前に冤罪が判明した事例もあるといいます。裁判官も人間である以上完璧ではないわけですので、冤罪をゼロにはできない難しさがあると思います。ただ、少なくとも科学技術の進歩により、科学に裏付けされた証拠により、冤罪の可能性は以前に比べれば今後は確実に極小化することができるだろうと思います。

さて、今回の放送は2020年11月でしたので、その後再審請求の結果、このギリシャ人に対する再審の結果がどうなったかとても気になるところです。今回のテーマが「裁判官の誤審」ですので、再審請求の結果は、無罪となる可能性が高いことが強く示唆されておりますが、実際のところ、このギリシャ人に対する結果は果たしてどうなったのでしょうか。

Beiheft17 ページ16行目以下に弁護士シュトラテさんの推理として、真犯人がこのギリシャ人男性に罪をなすりつけようとして、以前に彼が狩猟に使った薬莢を故意に犯行現場に置いた可能性が高いことを紹介しているところなど、まるで推理小説を読んでいるかのようなスリリングな場面がありました。

さて、今回のテーマである Justizirrtum という単語ですが、手元の「アクセス独和辞典」で改めて調べますと、「階層・地位・領域・思潮・状態」を意味する tum という接尾辞で終わる名詞は、基本的に中性名詞である旨記載されています。そして例外が der Irrtum と der Reichtum の2語だということです。これは以前学んだことがあるような記憶がありますが、すっかり忘れていました。

ところで、2021年9月26日に行われたドイツ連邦議会選挙の結果、事前に予想されていたこととは言えど各政党も単独では過半数の得票が得られなかったため、今後の連立政権樹立をめぐる交渉が続いています。政策的には CDU/CSU と FDP が、そして SPD と Grüne がそれぞれ比較的近いようですが、いずれも過半数には到底届きません。どうやら、現時点では各政党のシンボルカラーにより「信号連立 (SPD、Grüne および FDP)」か「ジャマイカ連立 (CDU/CSU、FDP および Grüne)」が可能性として取りざたされているようです。このいずれかの内では「信号連立」の可能性がより高いようですが、EUの要の国であるドイツの政治空白が長く続くのは決して好ましいとは思えませんので、早めに連立交渉が決着して欲しいものです。一昨日のニュースでは、「信号連立」を目指す上記3党の幹部らの話し合いの結果、メルケル首相の後任である連邦首相の選出が12月中旬くらいを予定していることが伝えられていました。年明けまでかかった前回の連立交渉のようなことがないように望みたいものです。翻って日本においては、衆議院議員総選挙の選挙運動が真っ最中で、投開票は1週間後の10月31日に行われます。

K. K

2021年11月30日

2021年10月 Nr. 488

さて、今回は、「節度」が話題になっています。

人がなすあらゆることにおいて自制する美德は、節度と称します。節度は、知恵、賢明さおよび公正・正義と並び、よき人生のために必要となる美德に含まれます。しかしながら、多くの広告により、人が自制することは困難になります。

ハンプルさん (Frau Hampf) は23才ですが、インターネットへのアクセスができる携帯電話はどうしても必要であると考えた人々のひとりでした。携帯電話を1台、ハンプルさんは持っていましたが、生活にほんとうに必要な重要なことにより多く専念するために手放しましたし、ほんとうに必要としない多くのものを今、諦めています。この電話でどこでも、何時でも連絡がとれることは、ハンプルさんには煩わしいものでした。また今何が起きているかを常に知ろうとすることは、時間の浪費であると感じています。

ハンプルさんの知人たちはそれゆえ、ハンプルさんを批判しました。ハンプルさんはおばあさんのような生き方をしていると言う人も多数おり、その人たちは彼女から離れていきました。一方でハンプルさんの今の生き方は素敵だという人たちもいました。もっとも、彼らも自分自身はハンプルさんと同じ事はできないといえます。

ハンプルさんは、自分の世代の多くの若者は、すべてのことが、自分たちには、肉体的にだけでなく、精神的にも多すぎる・過多であるということ、また頭脳がすべてをもち受け入れることができないことに気づいていると思っています。ハンプルさんは、古代哲学において処世術と称したものを実践したいと思っています。ハンプルさんは、他の人々との比較を避け、自分で決断した人生をととてもリラックスした状態で生きようと思っています。たとえ、その際に、(本来なら断念したくないのに) しつこく断念するようなことも時には断念しなければならなくなるとしても、です。

ハンプルさんにとっては、自然はとても重要です。ずっとそうでした。なぜならば、そう育ったからです。両親も非常に自然に愛着を持っている人間です。ハンプルさんは今、確かに都市に住んでいますが、日常生活の中で多くのことを断念していると(→ことにより、そう)感じています、そしてハンプルさんが自然により近くに寄って来ています。そして、ハンプルさんは、他の多くの人もかつて生活していたような状態に戻りたいと思っていますと信じています。インターネットという仮想空間に絶え間なく接続することを止めてから

は現実がまた自分に近くなっています。その場合 また、より多く自然と繋がっているように感じます。

トーマス・フォーゲル (Thomas Vogel) 氏により 2018 年、「節度」というタイトルおよび「私たちがかつての美德から学ぶことができるもの」というサブタイトルの書籍が出版されました。フォーゲル氏はハイデルベルク教育大学の教育学の教授です。古代ギリシャ人たちのように、フォーゲル氏は、節度という美德を一方では、人は知力・理性・悟性の助けを借りて自らの生活を処理すべきであると理解し、他方では冷静に、あるがままを受け入れること、すなわち人はどのような人間であるべきかという何かあるイメージにとらわれないように努めることであると理解しています。古代ギリシャ人に重要だったのは、そして彼にとっても重要なのは、過多・過剰と過少・不足との間で自分自身にとって適切な程度を見つけることです。

カーガーマンさん (Herr Kagermann) は、音楽家です。節度を守ることは、彼にとっては、例えば、特に好んで食べるものが昼食後にデザートとしてテーブルに置かれたときには、時折難しくなります。その場合は自分 1 人でボウル全部の量を平らげてしまいたいくらいです。しかしながら、カーガーマンさんはよりシンプルに生き、節度を守ることを決心しました。なぜならば、そうすると知的なことに従事したり、ひょっとして援助が必要かもしれない人の方を振り向いたりするための時間をより多く持てるからです。

ラウレンツさん (Frau Laurenz) は、今日、人々において様々な点に関し、適切な程度、つまり節度に対する感覚が失われているという見解です。特に毎日使うものにおいて、つまり消費活動やインターネットを通じたコミュニケーションにおいてはそうですし、旅行においてもそのことがいえるといいます。節度について話す人は、多くの人たちに嫌われます。多くの人たちにとっては、節度は、肯定的に捉えられた概念では全くなく、退屈、凡庸・平均、乏しさおよび禁欲・苦行のように聞こえるからです。

ラウレンツさんにとっては、人間はより多くのものを求めたり、限度を拡大し、超過することを当然に求めたりする存在です。これに、悪いときを生き延びることができるように備蓄をしようとする努力が加わります。この行動はちょうど動物においても見られることです。それに対して、節度は、世界宗教においては倫理的な態度・考え方として重要な役割を果たしています。ベネディクトゥスは、質素に、冷静にそして楽しく生きることを教えました……。

さて、大量生産、大量消費、大量廃棄の現代社会では、マスコミを通じた企業間の宣伝合戦が繰り広げられていることも相まって、一般的には確かに節度を保ちながら生活するこ

とは中々難しい状況にあると思いますし、自分自身の日常生活を振り返ってもそのように感じます。ただ、最近では国連において採択されたSDGs（持続可能な開発目標）のキャンペーンの広がりに従い、その中のいくつかの目標を達成するための手段として「エシカル消費」という言葉も人々の間に徐々に浸透してきています。その結果、環境や人権に対して十分に配慮された商品やサービスを選択して買い求めることが意識されるようになりつつあると思います。そうした動きの中で、結果的に大量生産、大量消費、大量廃棄を見直そうという動きも一部には見られますので、小規模ながら今後は変わって行く可能性もありそうです。期待したいと思います。

ところで、放送および課題においてハンプルさんが携帯電話を手放したことが述べられていましたが、実は私もそのひとりです。ただ、私の場合には、手放したのがつい最近ではなく、まだ携帯電話の普及率が現在に比べればそれほど高くなかったほぼ二十年以上前に遡ります。当時の私はまだ在職していましたので、会社から貸与された携帯電話を業務に使用し、取引先からも、ハンプルさんの言う「いつでも、どこでも電話連絡がつく」状態にありました。それは私に限った事ではありませんでしたので、そのようなものと受け止めておりました。しかしながら、同時に煩わしいとも感じておりましたので、その後職場を異動したことで貸与されていた携帯電話は会社に返却し、ほっとした気持ちになったことを思い出します。そういう経験がありましたので、プライベートにおいても「いつでも、どこでも連絡がつく」状態は不要だと考え、携帯電話を持つことはありませんでした。もちろん携帯電話を持たないことによる不便を感じたことは何度もありましたが、持たないメリットの方が大きいと判断し今まで持たないで済ませてきました。ただ、パソコンによるインターネット接続やメール使用は私にとっても必要不可欠なものですので、この点はハンプルさんとは大きく異なるかもしれません。もっとも、ハンプルさんがパソコンまで手放しているかどうかについては言及されていないようですので、確かなことは言えませんが、ミニマリストを自認しているハンプルさんですから、ひょっとするとやはりパソコンも持っていないかもしれません。それでも不便を感じずに生活できるとすれば、やはり筋金入りのミニマリストだと思います。

K. K

2021年12月29日

2021年11月 Nr. 489

さて、今回は、完璧主義 (r Perfektionismus) が話題になっています。

Nr. 489 の B 面において、ヘンリーケ・シュタイン (Henrike Stein) さんの完璧主義についておよび完璧主義がいかにかに人の負担になりうるかについての南西ドイツ放送の午後の放送番組を聴くことができます。シュタインさんは完璧主義者を自称しています。何かを首尾良く行った場合でも、シュタインさんには十分ではありません。すべてを完璧に行いたいのです。そして、それに悩んでいます。従って、シュタインさんは、今回の放送の中で自分自身および他の人に関して、もっと寛大さを持った、また能率万能主義に由来する心理的圧迫の少ない人生・生活を支持しています。

シュタインさんの祖父は、シュタインさんには自身と全く同様に完璧主義のように思われます。彼女の祖父は1931年生まれで、かつて裁判官を務め、既に長い間年金を受給しています。ところが、いまだにとっても活動的ですし、裁判官としての職務のかたわら多くの書籍を著しました。現在ラインヘッセンに住んでいます。そこにシュタインさんは祖父を訪ねます。コロナ禍のため2人は屋外で話します。シュタインさんと全く同様祖父にとっても、精密な計画、綿密性および精確性がとても重要です。祖父は間違いを犯したくありません。そのため、結果として既に投函した手紙を再び返してもらおうというようなことが、かつてありました。彼はそれに成功しました。郵便ポストから手紙が回収される時、彼はその場に立ち、自分の手紙を返却してもらったのです。間違いをしたかもしれないと考えると、頭がおかしくなりそうでした。しかしながら、その手紙ではすべて問題がありませんでした。

失敗をしないだろうかという、この不安は孫であるシュタインさんも持っています。彼の完璧主義は、彼の重圧になりますが、しかしながら助けにもなります。なぜならば、彼が自分の完璧主義のプレッシャーのもとで、自ら予め設定し、他の人からも認められる大したものであるような、ある目標を達成した場合、それは結果から見ると彼にとっては素晴らしいからです。そうすると、認められた事に対しうれしいと思いますし、努力が報われたと思います。

ザスキアさんは放送ライターであるシュタインさんの知り合いで、42才です。結婚しており、2人の子供がいます。ザスキアさんは、自分の完璧主義は、既にとっても幼い頃から母親の影響を受けて生まれたものだという意見です。ザスキアさんにとって常に重要だったの

は、他の人たちが自分をどう思うかということでした。ザスキアさんはそこに一種の自意識の欠如を見えています。それは母親からザスキアさんに「伝染」したものだというのがザスキアさんの見解です。

ザスキアさんの家ではすべて、かなり徹底的に考えて家具を備えつけていますし、完璧に相互に調和しています。生活は家に無秩序・混乱をもたらします。ザスキアさんは、すべてのものがまたあるべき場所にある時に、やっと落ち着きます。整理整頓された状態は、彼女に信頼性と自分の生活を管理しているという感情を与えてくれます。しかしながら、片付けるべきものが常にある場合、くつろぎを見つけることは難しいのです。シュタインさんも常に何かを働いて処理したり、整理したりしています。ザスキアさんは、意識して寛ぎたいと思うことはとてもまれであると言います。なぜならば、そのためにはすべて本当に片付いているという状態であるという感情を持たなければならないからです。しかしながら、ザスキアさんは完璧主義者としてすべてを処理済みと見なすことは非常に難しいと言います。なぜならば、行うべきものが常にあるからです。

ザスキアさんがしかしながら寛ぐことを計画する場合、それを単に行うのではなく、まずそれを準備し、例えば、最高レベルでくつろげるような雰囲気を作るために、夜ろうそくに火をともし、シャンペンをグラスに注ぐことにより、寛ぐための計画をしましょう。

シュタインさんも似ています。シュタインさんも仕事を止めて、ちょっと時折休むことがしばしば難しいのです。長時間働いた日は、シュタインさんは自らの完璧主義をしばしば、プライベートの生活にも広げます。例えば軽い長編小説を読んで寛ぐのではなく、啓発的な本にとりかかるのがより好みです。

シュタインさんの友人のヤスミンさんは極度の完璧主義者ですので、祝典用のすべての部屋と庭も自分で折った何百もの折り紙のツルで飾り付けをするために、自らの結婚式前の夜を危うく犠牲にするところでした。しかしながら、ヤスミンさんがその作業のまっ最中だった時に、彼女の妹がやって来て、車に乗せて家に送りました・・・。

さて、今回テーマになっている完璧主義については、一つの語彙・用語としては当然認識していましたが、改めて調べてみますと、実は心理学上の専門用語のひとつとして「万全を期すために努力し、過度に高い目標基準を設定し、自分に厳しい自己評価を課し、他人からの評価を気にする性格を特徴とする人のこと。定められた時間、限られた時間の内にて完璧な状態を目指す考え方や、精神状態のことである。このような思想を持ったものや、そのような心理状態の者を完全主義者、もしくは完璧主義者と呼ぶ」(Wikipedia)と定義されていることを知り、放送に登場する人たちのこ

とを考えながら、納得した次第です。シュタインさんは自分の完璧主義を実践しながらも、完璧主義に対して心理的負担を感じています。一方で、シュタインさんの祖父、知人のザスキアさん、友人のヤスミンは、シュタインさんとは異なり負の面は放送を通じては私には余り感じられなかったような気がします。

今回放送に登場するシュタインさん、シュタインさんの祖父、ザスキアさん、ヤスミンさん共に上記の定義に当てはまるような気がします。シュタインさんとシュタインさんの比較的近い人たちですが、このような関係の中に 4 名もの完璧主義者が存在すること自体に私は驚きましたが、一方では日本には「類は友を呼ぶ」ということわざがあるように、似かよった者は自然に寄り集まるという意味ですが、彼らを見て納得できます。

例えば、シュタインさんの祖父の場合ですが、郵便ポストのところで待ち伏せて自分の投函した手紙を確認しようとした彼の行動には本当に驚きました。彼は元裁判官でしたので、私としては在職中に下した彼の判決に興味を湧いてきます。彼の完璧主義者としての正確さが判決を下す際にプラスに影響を及ぼしたのではないかと推測します。法律を厳密に適用するだろうと思われまので、より正確で裁量の余地が少ない判断が下されたのではないかと想像します。彼自身は、基本的に完璧主義を肯定的に捉えているとのことでした。一方では、職場の同僚との関係にどのような影響があったのかも興味深いところがあります。また、シュタインさんは、自身の完璧主義は、この祖父から、父親を経て自分自身へ「遺伝」したものだと考えているようです。

シュタインさんの知人のザスキアさんの場合についても、前述の通りの完璧主義の徹底ぶりです。自分自身を完璧主義者と称するだけでなく、それを肯定的にしか捉えていないことが窺われます。そういう意味では、シュタインさんが自身を完璧主義者と称すると同時に、それが自身に負担になっていることに気づいているのとは対照的だと思います。

また、シュタインさんの友人のヤスミンさん。彼女は教師ですが、放送当時は育児休業 (e Elternteilzeit) 中とのことでした。休業に入る以前は授業の準備に完璧を期すために多くの時間を割き、飲食や他の人とのつきあいも犠牲にするほどだったようです。また結婚式の前の夜の準備に関しても、前述したとおり実に徹底していました。これらの徹底ぶりには驚かされました。彼女の場合も学校という職場で同僚との関係がどうだったのか興味を湧きますし、育児休暇中の子育てにも何か彼女ならではの特徴が発揮されたのではないかと思います。

さて、私の周囲を見回してみてもこの 4 人のような完璧主義者はいませんが、もしいた場合、どのような感想を持つでしょうか。また、影響を受けることはあるでしょうか。

ところで、先週おもしろい体験をしましたので、ご報告いたします。現在受講中のゲーテの授業の体験談について、ゲーテの語学部担当者（私が知っている方です）から約 30 分間のインタビューを受けました。インタビュー方式は授業と同様 zoom を使ったオンライン方式で行われ、予め連絡を受けていた質問に日本語で回答するというものでしたが、画像の向こう側では語学部担当者に加えて、映像ディレクター（初めてお目にかかる方です）も同席していました。このインタビューはドイツ語ではなく日本語で話すということだったので、予め準備していたメモをもとに話せばさほど緊張せずに 100% 近く話すことができると考えておりましたが、実際にインタビューされてみますとなかなかそうも行きませんでした。振り返ってみますと、やはり緊張していたためか、普段話す時に比べ、言いよどみや言い間違いも多々散見されましたし、適切でない言葉遣いもあったようです。メモをしていたにもかかわらず言い忘れたこともありました。やはり場慣れしていないからでしょうか、母国語である日本語でさえ、そういう場では話すことの難しさを痛感させられた次第です。

今年は上記の体験インタビューだけでなく、同窓会、講演会、ゲルマニア会の座談会、ゲーテの授業など様々なイベントが zoom を使ったオンライン方式によって行われました。果たして来年は対面方式での開催が可能になるのでしょうか。

さて、今年もコロナで始まり、コロナで終わる 1 年となってしまいました。折角のオリンピックもいつもとは異なり全く楽しめず、本当に残念な年になってしまいました。残すところあと 1 週間程となりました。石山先生には今年も大変お世話になり、ありがとうございました。どうぞ良いお年をお迎えください。

K. K

2022年2月3日

2021年12月 Nr. 490

さて、今回は「命令」と「禁止」が話題となっています。

「トラにご用心！」は、少なからずの地域においてはいまだに子供への重要な要請となっています。それは命令法で du を使用する形式で表現されます。しかしながら、神の命令は、ルターが聖書を翻訳する際に助動詞 „sollen“ を使用して言い換えます。第一番目の戒律は、そこでは神に対し「私はあなたの主なる神である」と確認することで始まります。ユダヤ教徒およびキリスト教徒の神は人間に対し du で話しかけ、人間も神に対し du で話しかけます。例えば、ある有名な賛美歌・聖歌は次の歌詞で始まります。神に対し人間がこう話しかけます。 „♪Großer Gott, wir loben Dich. Herr, wir preisen Deine Stärke.“ (「♪われ 神をほめ 主とぞ 称えます」)

誰かに何かを gebieten する人は、彼にこれを befehlen することになります。つまり その名詞形 Gebot は Befehl です。命令は、親称の単数形または複数形、または敬称の形でなされます。例えば、 „Sei still!“ 「(du に対して) 静かにして!」、 „Seid still!“ 「(ihr に対して) 静かにして!」または „Seien Sie still!“ 「(Sie に対し) 静かにしなさい!」というようにです。しかしながら、命令は禁止としても現れます。聖書での第一の戒律は、他の神々を持つことの禁止です。第二および第五～第十までの戒律は禁止です。第三番目の戒律では、神は人間に対して祝日を神聖なものとして守る、つまり労働に従事せず、ミサにあずかることを命じ、第四番目の戒律では、父や母を敬うことを命じています。つまり、何かをなすという要求より、より多くの禁止事項があります。個々の人間および全人類の生涯は命令とそれより多くの禁止事項を伴っています。

ドイツでは飲食店において 2017 年以來禁煙となっていますし、車は市内では時速 50 キロ以上で走行できません。道路によっては、最高時速は 30 キロに制限されているところもあります。これには人は慣れていますが、しかしながら、命令は大抵の人々にとっては、禁止よりより好まれます。従って、オートバイ運転者たちに対するブレーキ講習においては肯定的な表現を用いて自分の位置を知ることを教えます。オートバイ運転者たちは当然、木に衝突してはなりません、木々を回避しなければならないことに集中すべきではなく、「木ではなく！」と考える代わりに、木の間の広々とした野原を見ることに集中しなければなりません。

公共の場所での禁煙において重要なのは、市民の健康を促進し、肺がんによる死亡者数を

減らすことです。しかしながら、この数字がこれによりどのくらい達成されるかは証明できません。なぜならば、それには余りに多くの要因が関係しているからです。しかしながら、禁煙の結果は公共の場所および建物全体でのよりよい空気です。なぜならば、廊下においても喫煙は禁止されているからです。飲食店において禁煙になったことにより、そうこうする内に、タバコの煙が空气中に漂っていないと、食事がより美味しくなることを喫煙者も納得しました。

コロナ・パンデミックはまた、結果として命令をもたらしました、例えば、他の人との距離を保つべしという要請をもたらしました。そしてその命令はまた、禁止としても表現することができます。・・・そして祖父母を訪問しないことを求められます。しかしながら、付属テキスト9ページの6行目のようには表現しません。なぜならば、神の命令ではなく、ウイルスに感染しないために一時的に家を出るべきでないというものだからです。それらは、適切な目的のために、つまり、生命を守ったり、救ったりするするか、自分自身と他の人を危険にさらさないために役立つ禁止だったからです。しかしながら、禁止よりももっと好ましいのは大抵の人にとっては、命令ですし、大抵の人にとってもっと好ましいのは、Bitten (依頼) の形態を使用した穏やかな・ソフトな要請です。

ラップさん (Frau Lapp) は、人々が動機づけをされるためには、人々を引きつけ、動かすものを必要とするという見解です。そのような目標としては、例えば、健全な環境、鍛えられた体または次の休暇のための貯金などがあり得ます。もう車は運転しないと決心する代わりに、環境のために、自分自身の健康のために何かをすることを計画するほうが好ましいはずです。そうすれば肯定的な目標が目の前にあるといいます。

しかしながら、プレヒトさん (Herr Precht) は、禁止には人はよりうまく合わせるができるという意見です。人々が果たす義務が少なく、少なすぎる禁止事項しか存在しない場合には、人々は、プレヒトさんの見解では、位置・方向を見失ってしまうとのことです。プレヒトさんは、人間は義務や禁止に対し深い欲求があると信じています。当然ながら、人は、(法律による禁止ではなく、) 自ら飲食店での喫煙を諦めることができたかもしれません、実際は(法律の)喫煙禁止によってようやく飲食店での禁煙が実現しました・・・。

さて、プレヒトさんは、付属テキストによりますと、「人類、人間社会および人間の共同体が存在して以来、そこには規則、つまり『～をなさい』と『～をしてはならない』というように表現される行動規範 (r Verhaltenskodex) が存在する」と言っています。確かに人間が人間との関わりを持ちながら生きていく上で行動規範は必須なのだと思います。もちろん、人間以外の動物においても自然界の「おきて」のような行動規範はありそうですが、人間界のように文字を使って具体的に表現されたものは存在しませんし、行動規範

が存在したとしても人間界ほど膨大な量は存在しないだろうと思います。では、その人間は文字を持たなかった時代にはこの行動規範をどのように伝えたのでしょうか。同じ時代を生きただけの人に対しては話し言葉や行動で伝え、後世には代々言い伝えたのだらうと想像します。ただ文字という手段により後世に伝えるというのは、数千年前に文字が存在してからの人間社会の歴史そのものですので、圧倒的に短い期間となります。何十万年も前に人類および人間社会が存在してからの歴史と比べれば、行動規範を文字で表現したのはごく最近のことだとも言えそうです。

また、プレヒトさんの見解では、「人々が果たす義務が少なく、少なすぎる禁止事項しか存在しない場合には、位置・方向を見失ってしまう」とのことですが、これは興味ある指摘だと思います。しかしながら、果たしてそうだろうかとも私は思います。義務も禁止事項も少なければ少ないほど、人間にとっては一見望ましいのではないかと私は感じますが・・・。

ところで、賛美歌・聖歌に全く詳しくない私は、課題の第一パラグラフにおいて流れた楽曲の歌詞を殆ど聴き取れませんでした。メロディーについては最近聞いたような気がしましたので、調べましたところ、前首相メルケルさんの退任式（2021年12月2日開催）で演奏された3つの曲の内の一つ「われ神をほめ」という賛美歌・聖歌ではないかと思いました。このメロディーは、賛美歌・聖歌に馴染みのない私にも厳かでこちよ響きがありましたし、中々印象深く、良いものだと感じました。

また、この賛美歌・聖歌を日本語で歌う場合の冒頭部の歌詞を調べましたところ、「われ神をほめ 主とぞ 称えます」が定訳となっているようですが、ドイツ語の歌詞を忠実に訳しますと「偉大なる神よ われらは 神をほめます 主よ われらは 主の強きを称えます」のように、もう少し長めの歌詞になると思います。しかしながら、そのような直訳調の歌詞にしますと、長すぎて曲にうまくマッチしないため、上記の定訳になったものと想像します。定訳は「われ」「神」「ほめ」「主」「たたえます」の名詞と動詞のわずか5語ですが、原文内容を簡潔かつ見事に伝えていると思いました。数多くの他の賛美歌・聖歌もやはり工夫がなされ、そのような傾向になっているのだらうと思います。

ところで、キリスト教などにおいては神と人間は互いに du で話しかけるとのことですが、最近のゲーテの授業においても duzen に関し意外なことを知りました。それは、「Ikea は発祥の地であるスウェーデンにおいて既に 50 年以上前からお客に対し duzen しており、ドイツにおいても 2003 年からお客に対し duzen し始め、その後 Adidas、Apple、Aldi などの企業がこれに追随している」というものでした。ただ、その Ikea でもカスタマーセンター (s Kundenzentrum) においては siezen しているとのことでした。

さて、最後になりましたが、遅ればせながら、今年も引き続きよろしくお願いたします。

K. K.